
とある異能《チート》の幻想作製《イマジンメイカー》

アーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート イマジンメイカー
とある異能の幻想作製

【Nコード】

N7694U

【作者名】

アーク

【あらすじ】

人口の約8割が学生である学園都市

そこにあらゆる幻想を創る事の出来る青年が居た

彼は名を白済しらずみかずま一真いまままたの名を幻想作製イマジンメイカーという

この特別な力を持つ白済の前にある日魔術師と名乗る男がやってきて・・・

科学と魔術が交差するとき物語が始まる

思いつきで書きました

gd gd な上駄文ですが見てくれれば幸いです

それと感想をください！

※物語が進行するにつれてここにあらすじを書き足すつもりです

第一話・電撃と巻き添え（前書き）

どーもアークです思い付きで書いてしまいました
ですが後悔はしていない！！
チートイマジンメイカー
という訳でとある異能の幻想作製始まります

第一話・電撃と巻き添え

人口の約8割が学生の都市『学園都市』

そこは記憶術や暗記術と言う名目で超能力を開発しているところだ
これは一人の特殊な能力を持った青年の物語である

7月19日

夏休みの前日

えゝ俺こと『白済一真』しらずみかずまは片手で頭を抑えながら悩んでいた
理由は簡単、俺の目の前を同級生にして友人の『上条当麻』かみじょうとうまが何故
だか不良共と追いかけてっこをしていた
まあ上条の事だどうせ『明日ッから夏休みだー』とか言ってテンシ
ョンハイにして何かやらかしたんだろう

「ハァー馬鹿か其れともアホなのか？上条は」あいつ

そう言う俺は上条の消えていった方へ足を向け壮絶な笑みを浮かべ

「よし！からかいに行こう☆」

直後、音も無くその場から白済一真は姿を消した

（Side out）

（Side KAMIZYOU）

「あゝもう！！不幸だアアア！！」

そう叫びながら追いかけてくる不良から逃げるわたくし上条当麻
何故追われているかと言うと単純にこの不良たちがファミレスで中
学生の少女に集っていた為『助けてやっかなー』
そう思ったのが運の尽き結果10人程度の野郎に追っかけられる事
になってしまった

「だぁーこんななら明日っから夏休みだ何て調子ずくんじゃなか
った！」

いまさら嘆いても遅いものは遅い
どうしようか？と思っていると目の前にダークブルー色の髪をした
男が立っていた
男は俺の後ろの不良を気にせず片手を挙げ

「よー上条何時も通り不幸してるな」

等と言ってきた

「……………」

無視して走り続ける事にした
すると彼は

「オイ無視スンナー！」

叫びながら不良とともに追いかけて来ていた
何か面倒臭くなったので後ろを見ずに言い返した

「ウルセー白済！こちとら不幸に成りたくて成ったわけじゃねえ！

何だよ不良もお前も今日はマラソン大会ですかー!!」

やけくそになり言おうと彼・・・もとい白濱一真は惚けた口調で言った
「その不良なんだがもうとつくに居ないぞ？」

なん・・・だと？

Side out

Side SHIRAZUMI

アイツ不良が居なくなったのに気づいてない？

そう思いその事を言ってみたら上条は急に立ち止まりゆっくりとこちらを向いた

「それを早く言えー!!」

こちらに向かって叫んでいた

「ハハハッすまんお前がその事言う前に逃げたからお前が悪い」

「うっ、でも何で不良が居なくなる？」

上条が俺に聞くと答えは他のところから返ってきた

「決まってんじゃない私が焼いたんだから」

声のほうに顔を向けるとそこには茶髪で制服姿の少女が立っていた
何かものすごく青白い電気を髪から放っている

「何だビリビリか」

上条は疲れたように言った

「何だとは何よそして私は御坂美琴^{みさかみこと}って名前があるの！」

そう言い御坂は雷撃を放った
なぜか俺に

「チョツとまてやコラー!!!」

そう叫び左手で地面を殴る

^{ガーディアン}
「障壁!!!」

すると目の前に薄い目を凝らせば見える程度の膜が出来た
雷撃はそれに当たり霧散した

「レベル0に雷撃打つな!!!」

「うるさい大体レベル0がレベル5である私の攻撃防げるわけ無い
じゃない!!!」

叫びあう2人

レベルだ何だと言っているが決して頭が可笑しい訳ではない
白済たちが済んでいるこの学園都市は超能力を開発している

超能力とは何か簡単に言えば手から炎出したり透視したりする用は
SF的な何かである

この超能力には力の序列があり

力を使えないまたは使えても弱すぎる 無能力（レベル0）

スプーンを曲げる程度の役に立たない 低能力（レベル1）

レベル1よりはいいが殆ど変わらない 異能力（レベル2）

日常生活で使用して便利と感じられる 強能力（レベル3）

軍隊において価値を感じられるほどの 大能力（レベル4）

単独で軍隊と渡り合える力を持った 超能力（レベル5）

誰もたどり着いたことの無い 絶対能力（レベル6）

と成っており実質最強であるレベル5は7人しかいなくその内の1人であり

目の前で目標を上条に変えてバカスカ雷撃ってる
御坂美琴はレベル5第3位の超電磁砲と呼ばれている

因みに上条もレベル0なのだが幻想殺しと言う

異能の力であれば何であろうと触れれば消し去るとかふざけ切ったチートなのである

「まあ俺も人の事言えないか」

自嘲気味に言う俺

俺のレベル0なのだが上条と同じで少し変わった力を持っている
イマジンメイカー
幻想作製

上条が幻想を“殺す”のなら俺は幻想を“創る”能力である
単純に言えば手から炎を出す“幻想”を創ればその通りマッチ程度
だろうが世界を丸々焼き尽くす炎だろうが出すことが出来る
等々人の事を言えない位にはチートである
但し色々制限があるらしく

人を復活させる等出来ないことは幾つかある

とこんな事を思考している間に御坂と上条の戦いがヒートアップし
ていた

上条が御坂の電撃を軽くないなしている形でだが
もう見てるだけでも可哀想になって来たので一（御坂的な意味で）
止めることにした

「おーいお前らそろそろやめろー」

口で言ってみた⇒こちらに電撃が飛んできた
軽く無力化してやったZE

と言うかこうも立て続けに攻撃を無効化している上条を見ると
良く逃げようとしないなー
とか思えてくる

おや？御坂がコインを取り出し上空に投げた

「あんた達レールガンって言葉知ってる？」

何かものすごく怖い笑みをした御坂が聞いてきた
上条は頭に？マークを浮かべているがまさかとは思うが

「こういう事を言うらしいのよ、ねー！」

俺の予想通り御坂の2つ名であるレールガン
オレンジ色したレーザービームのようなものが飛んできた
方向は・・・

「こんなの避けられるかー!!」上条だった
音速の3倍程の速度であるレールガンを生身のましてや普通の人間
に避けられるはずが無かった
そう普通の人間ならば

「アブねー!」

右手を前に出す上条

それだけでレールガンを消滅させていた
本当ならレールガンの電撃部分しか幻想殺しは消せないためコイン
の摩擦熱で上条は消滅しているはずなのだがこの上条は違った
原作での幻想殺しは能力のみしか殺せないがこちらの上条は能力か
ら派生したある程度の物なら消し去ることができるのだ

「うっそ!? 消した何で!?!」

そんなことは知らない御坂は驚いていた
レールガンをまともに消した奴が居なかったのだろう

「つうかな危ないものに撃つなよ」
「そうだぞビリビリ! いきなり危ないものに撃つな!」顔を引き吊
らせビビリまくって言う台詞ではないな上条

「うっうっさい今日はこれ位にしておくはおぼえてなさい!」

捨て台詞を吐き立ち去る御坂

貴女に出来る事は一つ

お気の毒に（上条的な意味で）

「さして帰るとしますか」

「ああそうだな」

俺の言葉に反応し立ち上がりながら言う上条

「「アアゝネム（≡ω≡）zzz」」

そう言い2人は家へ帰った

第一話・電撃と巻き添え（後書き）

えゝ全く話が進まず終わりましたが
次回からはしっかりと進めます

次回予告

朝起きたら部屋の中に1人の子供が
その子には魔術師だという
ふーんって魔術師い！？

学校から帰ると家の前には
血だらけのシスターと黒い神父そして上条
その日から日常は非日常へと姿を変えた
科学と魔術が交差するとき物語は始まる

第二話・日常と非日常（前書き）

かなり遅くなりましたが投稿しましたアークです
今回は試しにケータイで書きました
イマジンメイカー
それではとある異能の幻想作製始まります

第二話・日常と非日常

「ボクの名前はクロスレイジ・アイリス、クロスって呼んでね☆」
何か目の前の子供がそんな事を言っている
何故こんな事になったかそれは今から30分前に遡る

～30分前～

「う、ふあ～」
うだるような暑さに苛まれながら白済一真は起床した
暑いならクーラーでも点ければ良いのだがそう言う訳には行かなか
った

それは昨日の夜から辺り一帯の電力が落ちてしまったのだ
まあ要は停電である

（某電撃姫が夜のはらいせで放った雷が発電所に直撃したのを白済
が知らないは当然だろう）
白済は暑さでまともに働かない頭で辺りを見渡した
変わらないテレビ
変わらないキッチン
そして黒い何かが蠢くソファ―

「あ？黒い塊？」

確か昨日は特に何も買ったわけではないし連れてきたわけでも無い
なのに何故

「生き物が居んだ？」

それは確かに動いていた
気になった白済はそれに近づいていった

「人間？　つうか子供？」

髪は黒色をした肩に掛かる程度服も黒色と全てが黒だった
その子供が寝返りを打ちこちらに顔を向けた

「え、女の子？」

驚いたように呟いた白済

寝顔はどう見ても女の子だった
そして白済はどうするか考えた

1. 叩き起こす
2. そのまま放り投げる
3. 優しく起こす
4. 放置

「（1はダメだ2も同様に子供にやってはいけないだろ、3は〴〵何となく無理だなうん。となると）放置するか・・・」そのまま見て見ぬ振りをしようとしたその時

「ん・・・」

起きてしまったようだ

目を擦りながら起きてきた少女（？）に向けて白済は言った

「誰なんだ？　アンタ」

と言うわけで冒頭のような状態になったのだった
今この子に関して解っているのは3つ

この子の名前がクロスレイジ・アイリスと言うこと
そして男の娘・・・じゃなくて男の子だと言うこと
(それを聞いた白済が驚いたのは言うまでもない)

だが何よりも驚いたのは「あっボク因みに魔術師何だ〜スゴいだろ
♪」
と言うことだ

「そーなのかー魔術師ねえ、ってハァ!? 魔術師いてのはあれか呪
文唱えて死者復活的な奴か」

かなり取り乱している白済それも当然だろう普通の人でも魔法使い
や魔術師などと言われたら頭が可笑しいかと思うかびっくりするだ
ろう

さらにここは学園都市言うなれば科学至極主義なので魔術等という
オカルトの類を信じている人など皆無に等しいのだ

そのため白済もオカルトには耐性はなかった

のだが興味を持ってしまった何故かそれは”面白そうだから”

そう白済の基本的な行動理念は面白ければ何でも良いのだ

なので白済はクロスに魔術に着いて聞くことにした

「何なんだ? その魔術師ってのは」その言葉にクロスは言った

「魔術師はその名の通り魔術使うものの事だよ最近の魔術師は近代
スウィザード
魔術師と言って自分の魂に自分の魔法名え〜と信念みたいなものを
刻み込むんだ」

「ふ〜んでじゃあクロスもあるのか魔法名が」

気になって聞いてみた

「うん在るには在るけど」「けど？」
「言いたくないんだ」

少し悲しい顔をしながら言うクロス

「どうして？何かあったのか」
「うん少しね昔に」

そのまま黙ってしまったクロス
空気がとても重くなってしまったところで一つ聞き忘れていたことを聞いてみることにした

「そういやクロスお前何で俺の家に居たんだ？」

「あっそれは君に会いに来たんだ。正確には力を貸して欲しいんだ」
「力？無能力（レベル0）の俺にか？」

白済は学園都市最低の無能力者つまり何も能力を持っていないのだ
が・・・

次の瞬間クロスは言った

イマジンメイカー

「君が幻想作製と知っての事だよ」

今コイツなんて言った？

白済の周りで白済の能力について知っているのはごく少数なのに何でその事を知ってるんだ

「ん？何で知ってるのか？って顔をしてるねそれは協会が調べたんだよ」

「協会？今協会が調べたって言ったよな？」

「うん。でも協会って言っても解らないよね」

頷く白済に対しクロスは続けた

「協会って言うのは単純に言えば組織みたいなものでイギリス清教とか聞いたこと無い？」

それぐらいなら歴史等で習った記憶があった

「でクロスが所属しているのはどこなんだ？」

一応聞く白済

「ボクはそのイギリス清教なんだけどさらに細かく言えば第零聖堂区必要悪の協会って所」
ネセサリウス

「なんだ？その何とかってのは」

「必要悪の協会はネセサリウスその名の通り必要悪なんだ」
「と言うと？」

うーんと唸り何かを考えているクロス

「あっイギリスは魔女狩りに特化しているのは知ってる？」

「魔女狩りつつうと火炙りトカする奴か？」

「ちよっと違うかも。でもまあいいや。ネセサリウス必要悪の協会は毒をもって毒を制すつまり」

一呼吸開けクロスは言った

「『魔女を狩るには魔女を』って考えで出来た部署なんだ」

正確に言えば魔女というより魔術師何だけどね。と言うクロス

「協会についてはわかった？」

「大体なら」

「なら話を元に戻すよ。君え」と

白済の名前を知らないのか唸っている

俺の能力名を調べられる程の組織なら名前くらい調べてやれよなどと白済は思っていた

「ハア俺の名前は白済一真だ。」

「じゃあ一真、君に頼みたいのは一つ」

先ほどよりも真剣な顔をしてクロスは言った

「とある少女を助けて欲しいんだ」

「・・・何で？まさか他の協会とかに追われてる？」

「そっちの方がまだ良いかもね」

顔をしかめながら言うクロス

「どういう事だ？」

「彼女は一年毎に記憶を消さないと死んでしまうんだ」

「どうして？」

クロスはその彼女の事を語った

完全記憶能力と言うこと

そのせいで一年周期で記憶を消さないと脳の容量がパンクして死んでしまうと言うこと

そして彼女が

10万3000冊の魔導書の毒に侵されているという事

「魔導書？」

「うん。名前の通り魔術を詰め込んだ本で信仰の薄いこの国の人は読んだら確実に廃人になるほどの力があるんだ」

「じゃあ魔術師であるアンタらは読んだらどうなるんだ？」

クロスは真顔でこう言った

「頭の中に知識が入ってきて下手したら死ぬかもね。ま、その下手したらをする魔術師は初心者だけど。でもどんなにすぐれた魔術師でも頭が割れるような激痛は免れないよ」

「そんなのを10万3000冊も・・・ってことは一年周期で記憶を消さないといけないってのは」

「その10万3000冊のせいで殆どの脳の容量が喰われているんだ」

クロスの言っていることがどこか引かかった白済

クロス疑っている訳ではないが何かがおかしいと思っていた
そんな中白済の携帯が鳴った

♪~~~~♪~~~~♪~~~~

「ん？こんな時間に電話かすまんクロス少し待っててくれ」

頷くクロスを視界の端でとらえる白済

携帯を見るとどうやら担任からのようだ

「珍しいな小萌先生からなんて。モシモシ」

「モシモシ白済ちゃんですか？」

「俺の携帯で他の人でしたことありますか先生」

茶化す白済に対し小萌先生はお返しとばかりにこう言った

「白済ちゃん忘れてると思いますが今日から補習ですよ？」
「・・・」

携帯ごしに白済ちゃん？と聞こえるがもはやそんな事気にしていません
かった

補習？そんなの聞いてねえ！？

愕然とする白済に小萌先生はそう言うことでまた学校でなのです。
と言って切ってしまった

「どうしたの一真？」

心配そうに聞いてくるクロス

「いや、俺今日補習だってorz」

「ドンマイww」

ギャグの様なことになっている白済家

そんな事よりと言い白済はクロスに話しかけた

「なあクロス」

「何？」

クロスの方を向く白済

その顔は真剣だった

「その少女の事後で詳しく教えてくれないか？」
「ってことは・・・」

フゥと息をつき答える白済

「かったりい」

白済の最初に思った事はそれだった
白済は今夏休みの補習を受けていた

この間の能力判定で無能力（レベル0）の判定を受けてしまったため補習を受ける事になってしまったのだ

補習の内容は最近習ったものばかりな為聞いても意味がなかった
机に突っ伏していると斜め前から声がかかった

「そう言うなって白ヤン小萌センセにあえて更に授業受けられるなんて最高やないか」

関西弁―（？）で話す青髪でピアスをしているこの男『青髪ピアス』
本名不明がとんでもない発言をしている

「お前はアレか？ロリコンなn「ロリが好きなんとちゃうロリも好きなんやで」・・・」

やはりこの男H E ☆ N ☆ T A ☆ I のようだ

「変態やないあらゆる属性が守備範囲何やで！」

「それ話世間では変態と言うんだよ」

俺の前の席にいる上条にすら言われる始末

と言うよりなぜ俺の心が読めた？サイコメトラーなのかこいつは

「はいそこそれ以上喋りやがるとコロンプスの卵ですよー」

「「・・・スイマセン」」

ものすごく黒い笑みを浮かべながら注意する小萌先生

因みにコロンプスの卵とは卵の先端―（細いほう）を下にして立たせるという奴なのだが

「何で俺達が念導力の専攻科目しなきゃいねえんだ」

「確かにしかもアレ成功するなで居残りだし」

「小萌センセが居てくれるんやったらやっても良いけどな」

ま、俺は『卵が逆さでも立つ幻想』を創ればおkだが

っとうそうこうしている内に補習は終わったな

さて家に帰ってクロスの話を聞かなきゃな

~~~~~

〈繁華街〉

・・・何でこうなった

目の前には何故か家にいるはずのクロス

そして俺たちのいる場所は

「一真次あのヌイグルミ取って」

ゲーセンに居たしかもクレレンゲームの前

俺はクロスにせがまれて今クレレンでヌイグルミを取っていた

先程補習が終わって家に帰ろうとした時クロスが目の前に現れいきなり

「アレ取って一真」

クレレンゲームの中のヌイグルミを指さしたのだ

それで現在に至る

「・・・お前一応聞くが男だよな」「うん。そうだよ朝も驚いてたけど何で？」

だって見た目が女の子だろと言葉を出しかけた白済

更には今白済がクロスの為に取っているヌイグルミは女の子が欲しがるような物だった

コイツ性別偽ってんのか？

そう思わざるおえなかった

「まあ良いや。ほらクロスヌイグルミ」

数個目のヌイグルミを取りクロスに渡す白済

因みにヌイグルミは全で一発で取っていた

「ありがとうー」

お札を言いながらヌイグルミを抱くクロス

最早女の子意外の何者でもない

「クロス、俺先に帰るけどどうする？」

なんかこのままクロスと居るといろんな意味でヤバいので帰ることにした白済

「少しここら辺回ってから帰るね。でも忘れないでよあの約束の事」

「わかってるよ。じゃな」

約束とはとある少女の救出の事だろう

早く帰ってゲームでもすっかくそんな事を考えながら帰る白済

しばらく歩くと白済の自宅があるマンションに着いた  
そのままマンション中に入り家に帰ればいいのだが白済は強烈な違和感を感じた

「何かある」

呟いた白濱だがいままで立ってもマンションに入ろうとし無い  
否、入ろうとし無いのではなく入れないのだ

頭の中で声が響く

『来るな来るな来るな来るなクルナ来るな来るな来るな来る  
なクルナ来るな来くク』

その声は自分自身のもの自分はこの中にはいるのを拒んでいる

[illegible]

頭の中ではそう言っているのだが白濱は一步を踏み出した

「何があるんだろうな。俺を楽しませる何かだったらいが」

そう言いながら

階段を使い一番違和感が強い部分へと歩く  
そして一番違和感が強い場所へ着いた

「俺の家がある階かよ」

楽しきや何でも良いが俺の家が無くなりましたは止めて欲しいな  
とんでもなく場違いな考えをしながら顔を上げた  
そこには

強烈な炎で焼かれた様な廊下と赤い髪をした神父服をきた男  
そして血まみれで倒れている白い修道服をきた銀髪のシスター  
その間に立って居たのは

「上条お前何してんだよ」

友人の上条当麻だった

## 第二話・日常と非日常（後書き）

まったく戦いがないww

それに白済は初登場の男の娘にフラグを建てるという暴挙  
この二人はいたって普通です  
腐ってないよ！！

次回は白済を戦わせます

次回予告

赤い髪の神父と戦う事にした俺

そんな中相手に援軍がきてしまう

だがそれと戦っているのはクロスレイジ・アイリス

科学と魔術が交差する時物語は始まる

### 第三話・幻想を創るもの（前書き）

どもアークです

戦闘の描写が上手く行かない（泣）

それと感想をください！！

白済達に関することでも指摘でもかまいません

そして今回はようやく白済が戦います！！

ついでにステイルのオリジナル技を出してしまいましたへへ；

それではとある異能のイマジンメイカー幻想作製始まります

### 第三話・幻想を創るもの

「上条お前何してんだ」

最初にでたのはその言葉だった

目の前には焼かれた跡

血まみれのシスター

うつすらと笑みを浮かべる神父

神父と対峙するのは上条当麻

「馬鹿っ白済逃げろ！！」

焦った声で叫ぶ上条

だが神父はそれを許さなかった

「余所見とは余裕だね。炎よ（Kenaz）巨人に（Purisa  
z）苦痛の（Naupiz）贈り物を（Gebor）！」

神父はそう言うと言手から炎を出しこちらに撃ってきた

上条はそれに気づくが対処が間に合わない

ここで終わるそう誰もが思った

ただ一人を除いて

「イレイサー  
無力化」

「！？」

白済は眩く

ただ眩いた

それだけで神父が放った炎が溶けて消えるように無くなったのだ

「へえ君もその男のように攻撃を消せる口かい？」

神父は少し驚いているようだ

君もと言うことは上条はコイツに幻想殺し（イマジンブレイカー）使ったらしいな

だが俺は上条との相違点を言った

「俺は上条とはちと違うぜコイツは殺して俺は創るそれだけだ」

あっさりとネタをバラしてしまったが良いだろ多分

そして神父は言った

「ならおかしいね？創る事ができても君は消す事なんて出来ないはずだ」

イタイところを突いてきたなつと言いたいところだが

「なあに簡単だ。確かに俺は創る事しかできないだったら逆に相手の攻撃を無力化する”何か”を創れば良いだろ？」

「無茶苦茶だねその理屈」

言われちゃったよその一言何気に気にしてたのに

「ま良いか。上条お前その子持って下がってろ」

「お前は どうするんだ？」

お前俺の友人何年やってるよ。もうそれ位はわかるだろ？

心の中で言いつつため息をつき白済は言った

「決まってるんだろあの神父殴ってくる」



俺の家の前で喧嘩してる罰を与えてやらねば  
そう思いつつも現状の把握をする白済  
後ろにはシスターと上条

目の前には神父

避けることは許されない何故ならよければ友人の死が待っているか  
らだ

面白くなってきたじゃねえかと呟く白済

白済は相手を見たすると

神父は何かを発動させようとしていた

「灰は灰に (Ash To Ash)」

「<sup>コピー</sup>転写」

再び何かを呟く白済

それを気にせず神父は呪を紡いだ

「塵は塵に (Dust To Dust)」

そう言うとき神父の手から炎が現れた

『灰は灰に塵は塵に』

白済もそれに続くように言っただけだと白済の手からも炎が現れる

「吸血殺しの (Squeamish)」

『吸血殺しの』

声が重なっていく

そして最後は完全に重なった

「『紅十字（Bloody Road）！！』」

神父の手からは青白い炎が

白済の手からは赤黒い炎がそれぞれ放たれた

ドガアアアアアアン！

互いの炎がぶつかり派手は爆発が起きた

「まさか人の攻撃を模倣するなんてね」

神父は純粹に驚いているようだ

未だ余裕の表情の神父に白済は言った

「神父さんよそろそろ切り札出さないか？」

白済は神父が手加減をしているのに気付いていた

「流石に気づくよね。因みに僕の名前は神父ではなくステイルⅡマ  
グヌスだよ」神父もといステイルはそう言いながらカードの様な物  
を取り出した

それをこちらに投げ飛ばし彼は言った

「炎の囲い（フレイムリング）」

直後ステイルの周りに炎の輪が数個現れる

「それが切り札か…」

「いや、違うよこれは切り札ではない。ここで使う気は無いからね」

あくまでも切り札は使う気はないようだ

ステイルは炎の輪をこちらに射出してきた

「こんなん俺を倒せると思ってるとはな。無力化<sup>イレイサー</sup>」

迫り来る炎を無力化しようと幻想を作製したのだが

「無力化が効かない!？」

炎は消えることなく白済に襲いかかった

「それはね対象の周りを炎で囲い焼き尽くすんだ。ついでに一つヒントをあげるよ確かにそれは一度無力化されたんだけど消えなかった」

白済は炎を浴びる前に障壁<sup>ガーディアン</sup>を発動し事なきを得た

しかしステイルの言う通り炎が囲いの様に白済の周りを取り囲んでいた

『くそっ障壁がそろそろ限界になるな。それに奴の言葉”一度は消された”と言うことは・・・』

思考している間にも炎の囲いは狭まってゆく

障壁は本来攻撃をそらし相手に隙を作らせるための謂わば囿  
そのため長時間の防御は向いていないのだ

「どうしたんだい？まさかもう終わ리と言っくんじゃないだろう超能力者？」

ステイルの挑発的な言動に切れそうになるが抑える白済

「いや、ただお前の炎がどこまで保つか試してただけだ」

ステイルは手に炎を作り出し笑いながら言った

そう言い炎を放った

炎の囲い（フレイムリング）にステイルが放った炎が当たり爆発を起こす

「し、白濟！」

『あの爆発に巻き込まれては生きてはないだろう』

その意見を代表するかのようによてイルは上条に言う

再び炎を作り出し上条に放った

シスターだけでも助けよう上条はそう思い後ろに軽く投げようとしたのだが

「誰が生きてないって？」

放たれた炎は消え去りその場には消えたはずの白済一真が立っていた

「なっありえない！？炎の囲いの中に入って生きていられる人間など普通じゃない！！」

かなり取り乱しているステイルそれも当然だ殺したはずの人間が今この場に現れたのだから

「普通じゃないね…ならそうなんじゃない？俺は普通じゃないそれで良いか？」

明らかに人をバカにした言い方それにステイルは冷静に言った

「何故炎の囲いを抜け出せたんだ」

その質問に白済はこう答えた

「簡単さ。お前はこう言った”一度は消えた”と。つまりそれは高度の再生能力を持っているんだろう？」

「だがを知ったくらいで何故」

「そう慌てんなくて」

白済は頭を掻きながら続けた

「だったら話は簡単だ。その再生能力という”現実”を無力化という”幻想”で作り替えたんだ。あとは炎を俺が爆破させその直後俺は下の階に転送した」

「有り得ないそんな事が可能なのか」

驚愕するステイルに対し白済はこう告げた

「俺の創り出す幻想はあり得ないなんてモノと思うな。に、してもだ」

そこで区切りステイルを睨みつけこう言った

「本当に面白くないなこの状況」

白済はうんざりしたような顔で呟いた

白済の行動理念は

”面白ければ良い”

ただもう一つ白済の行動理念が存在した

”面白くないことを無くす”

白済にとって面白くない事それは

「理不尽だよなお前」

理不尽等による罪のない者が一方的に虐げられる事だった

「人の家の前で喧嘩はするは、相手が上条だは、その上条が血まみれのシスターを守りながら戦ってる。理不尽すぎてつまらない」

「だったらどうするんだい？」

あくまでも余裕でいるステイルそれは本当の余裕か虚勢か不明だった

「どんな理由であれ俺の友人とそのシスターを傷つけるってんなら」

拳を握りながら告げた

「その現実、幻想に創り換えるまでだ!!」

言い終わると同時にステイルに向かって走る

「僕もそう甘くない!」

それを阻止するかのように炎を放つが消されてしまう  
白済はステイルの懐に入り思いつ切り殴り飛ばした

「少し眠っとけ!!」

ステイルはそのまま数メートル吹っ飛び気絶した

「大丈夫か白済!？」

心配した顔で上条はこちらに近づいてきた

「大丈夫に決まっている。俺を誰だと思ってる」

「白済一真」

そんな事は分かり切っている

上条は場を和ませようとしたのだろう

「ハア。アホが」

「なっ誰がアホだ」

お前以外に誰がいる

上条には言わないでそっと心の中で言う

「ふうっ終わったな白済」

「……………」

「白済？」

何も言わずに怪訝な表情をする白済に上条は少し不安になった  
こういう顔をするときは決まって何かあるからだ

「これは…いや…まさか……ッ!？」

「オイどうした? しらずm「退け上条!!」 なっうわ!」

いきなり突き飛ばされた上条はシスターを抱えているためそのまま  
尻餅をついてしまう

「イッテいきなりなんなんだよ白済…」

グシャリ

何か果物が潰れるような音が聞こえた  
と同時に顔に何か生温かい液体がかかった

「何だ? これ」

恐る恐る顔に付いた液体を手に取りそれを見た

それは

人間の血液だった

そしてその血液の持ち主は

「白…済?」

血だらけで身体中に切り傷をつけた白済一真のものだった



「白済！？大丈夫なのか！？」

「ゴハッだい：じょうぶだ：今<sup>リカパー</sup>治癒をしている。それよりも：」

白済は後ろ先ほどステイルが吹っ飛んだ方をみた

そこには2メートルを越えるかもしれない位長い刀を持った女性が立っていた

女性は静かに言う

「あなた達はその娘を置いて去りなさい」

それに反論したのは上条だった

「ふっざけんなよ！！お前等がおっかけ回して傷つけておいてインデックスをおいて去れだ？ふざけんな！！」

インデックスとは上条が抱えているシスターの事だろう

「何度でも言いますその娘を置いて去りなさい。さもなくばその少年のようになりますよ」

刀の刃を少し見せながら言う

それを見て白済は内心焦っていた

「チッ分が悪すぎる。それにあの女ステイルってのより強いな」

気配が明らかに違う

白済はそう感じていた

ステイルはどんな奴でもじやまな奴は排除していく  
そんな感覚だった

だがこの女性はいつでも殺せるのに今殺す必要はない  
この女性はそう言いたそうな表情をしていた

「もう一度問います。その娘を置いて「くどいよ。神裂」っ!？」

ガキンッ!

金属がぶつかる音が鳴る

神裂：そう呼ばれた先程の女性は鞘で何かを払いのけ後ろに飛ぶ  
神裂が払ったのは1メートル程度の剣

「誰ですか!」

叫ぶ神裂

対して答えるのは

「ん? ボクだよ」

クロスレイジ・アイリスだった

「え? クロスお前どうして」

白済はいきなりクロスが現れたので驚いている

「ボクがここに来る理由は一つしかないよ。一真朝言ったこと覚えてる? ボクが一真に頼んだこと」

とある少女を助ける

そうクロスは言っていた

「その娘インデックスがボクの助けたい少女なんだ」

そう言いながら神裂を睨む

「……………」

「一真。インデックスをつれて逃げて」

「クロスはどうすんだ」

クロスはゆっくり息を吐ききっぱりと言った

「神裂を足止めする」

白済は黙って頷いた

「頼んだクロス。行くぞ上条」

そう言いその場を白済達はさった

「さて一真がこの場に居なくなったのはラッキーかな」

「どういう…ことですか？」

クロスの良くわからない発言に戸惑う神裂

「ん？だって今からやるのは殺し合いだよ？それを一般人に見せられる？」

「クロス、と言いましたね。」

うん、と答えるクロス

「そうですか…あなたが」

そこで区切り神裂は言い放つ

「最高の剣士」  
ソードマスター

それが戦いの合図となった

### 第三話・幻想を創るもの（後書き）

神裂とクロス登場！

ステイルのオリジナル技は正直イノケンティウスをまだ出したくないから作っただすよね・・・

ついでですから白済の能力についておさらいしたいと思います

ガーディアン  
障壁

主に防御に使う

だが白済はこれを相手の攻撃を受け流し隙を作らせる為に使用  
長時間使用はできない

イレイサー  
無力化

上条の幻想殺しの離れたものを消せるバージョン

上条と同じで一定以上のものは消せずに反らすしかない

ワープ  
転送

移動用の幻想

テレポーターとは少し違うのだが白済は自分でもどう移動している  
か分からない

リカバリー  
治癒

その名の通り回復をする事ができる  
ただし対象は自分のみ

とこんなものです。ね。白済の能力は。ですが随時増えていきます  
多くなったりしてきたらキャラ設定とか出す予定です

次回も戦闘です……この小説ギャグが入ってない（泣）

## 次回予告

クロスに言われてその場から逃げた俺達

インデックスをどうにかして助けなければいけないのだが…

科学と魔術が交差するとき物語は始まる

#### 第四話・絶望《ふこう》と見いだされた希望《こううん》(前書き)

まさかのわずか三日での投稿ww

何をやっているんだ俺

だが俺は後悔はしない!! 今回戦闘は有りません

それではとある異能のイマジンメイカー幻想作製始まります

#### 第四話・絶望《ふこう》と見いだされた希望《こううん》

俺と上条は走っていた

理由は先程の戦闘でいきなり現れた神裂から逃げるため

「ハアハアッここで良いだろ」

上条は立ち止まり白済に告げた

「ああもう良さそうだな」

白済も立ち止まりあたりを見渡す

「上条あそこ等辺にしよう」

ベンチを指さしそこにインデックスを傷が触れないように座らせた

「なあ白済、クロスってのは大丈夫なのか？」

上条はインデックスの事を見ながらそう聞いてきた

「俺には分からない。だがクロスは足止めすると言ったなら大丈夫だろ」

「そう…か」

お互い黙ってしまう

この空気をどうにかしたいため上条は言った

「白済、インデックスの怪我どうにかできないか？」

「上条、そいつは無理だ俺には”制約”がある以上他者の蘇生、回



復は不可能だ」

白済はこの時点で病院に行くと言う選択肢を捨てていた  
何故なら病院に行けばほぼ確実にIDの掲示を迫られてしまうからだ  
移動中に上条からインデックスがIDを持っていないのを聞いてい  
たため不可能だと判断したのだ

「せめて俺等のどちらかが魔術を使えればな……」

「それは無理なんだよ」

魔術という単語を聞いたからだろうかインデックスは言った

「超能力者は魔術の発動は絶対しちゃダメなんだよ」

「インデックスどう言うことだ？」上条の問いにインデックスは

「脳の回路が違うからね魔術は才能の無いごく普通の人しか使えな  
いんだよ。超能力者は脳の回路が違うみたいだからね。使ったら拒  
絶反応がでてしまうんだよ」

つまり俺達には魔術は使えないか

白済はそう思いながらも言った

「普通”の人間なら可能なんだな？まさかあなたはバカだからで  
きませんなんて事はないか？」

「白済お前まさか…」

上条は白済が何を言っているのかが薄らとわかったようだ  
その質問にインデックスは答えた

「うん。私の言う通りにやれば確実に出来るんだよ」その言葉に白

済は一人の人を巻き込む事を確定させた

「なら一人心当たりがある。俺に付いてきてくれ」

希望が見えてきたぜ

そう言う白済の後を二人は付いていった

「凄すぎだろ…この家」

三人は白済の心当たりのある家にいた

その家は一言で言うとか豪邸だった

白済は躊躇せずにその扉を叩いた

「………何だい？こんな夜遅くに？」

中から出てきたのは二十歳位の男性だった

男性はうんざりしたかのように呟いた

「白済、君はまた何かやらかしたのか？今度は友達付きで」

「やらかしたと言うより巻き込まれたが正しいかな。悪いが部屋を借りるぞ。話はその後だ」一体白済は何をしているんだろう？

そんな心配をする上条を後目に二人は部屋に入っていた

上条は二人に付いていった

「さて、一応自己紹介しておくね。僕は大道洋だいどうようよろしく」「はい。俺は上条当麻です。」

二人は自己紹介を済ませると大道は白済に聞いた

「で、何をしたんだ？また『不良殴り飛ばした』なんて言ったら僕

が殴り飛ばすからね」

「そう言う冗談はこれ見てから言え。ついでに不良神父なら殴り飛ばしたが」

そう言いながら上条を正確にはその後ろを指差した  
それを見た大道は驚きと怒りを含ませて言った

「白済なんで病院に連れて行かないんだ！」

「病院に行かせたいくらいだがこいつにはIDが存在しないから。  
だから洋あんたに頼んでるんだ」

そう言う和白済は先程までの経緯を話した  
魔術の事彼女の事彼女を傷つけた魔術師の事等を

「まさかそんな事が」

「で、だ洋に頼みたいのは一つ魔術の発動を手伝って欲しい。ダメ  
なら他を当たるから」

大道はため息を付き言った

「良いよ。白済の頼みだしね。どうすれば良い？」

大道はインデックスに聞いた

「まずは今が何時か教えてほしいんだよ」

大道は自分の時計を見ながら言った

「午後八時半。ついでに今日は七月の二十日だよ」

インデックスは近くの窓を見て言った

「星の位置と月の角度から見て……天狼星<sup>シリウス</sup>方向に誤差0，0三八で一致したんだよ。それで確認だけど七月二十日の午後八時半でいいんだね？」

「うん。それでどうすればいいんだい？」

「それよりとうま」

「何だインデックス」

「とうま達は一応ここから出て行った方がいいかも」

それはある意味一番残酷だった

「やっぱこの右手<sup>ちから</sup>のせいなのか？」

「うん。それもあるけど」

そこでインデックスは白済を見た

「あなたの能力も魔術に何か及ぼしそうだから」

「……だろうな。上条一旦ここを出よう」

上条は悔しそうな表情をしながら白済と一緒に出て行った

「さて始めようか？」

大道とインデックスは魔術を発動させるために準備を始めた

~~~~~

「……………」
「……………」

屋外にて白済と上条は佇んでいた

そして二人は先程から黙りきっていた

それもそうだろうインデックスの傷を治すことを出来ず人を巻き込み
自分達の能力のせいで手伝うこともできずに大道の家を出てきたのだ
それが二人は悔しかったのだろう

そんな中上条は独り言のように言った

「この右手のせいでインデックスを助けられないのか…」
「……………」

「俺ってなんでこうも不幸なんだろうな…」インデックスを自分で
助けられないのがさうとうキテいるのかいつもは明るい上条も今回は
暗くなっていた

そんな上条に白済は言った

「お前だけじゃないさ。俺も同じだ。それに」
「それに？」

「仕方はないとはいえ洋を巻き込んだしまった」

二人が悔やんでいると大道の家から光が漏れた
恐らく魔術を発動させたのだろう

それを見て白済は自分にも言い聞かせるように言った

「でもさ、俺達って不幸だけど幸運なんだよな」
「え？」

意外な顔をする上条に白済はこう続けた

「だってさ普通は『魔術を発動するの手伝って』なんていったら断られるはずなのに洋は疑いもせずに手伝ってくれたんだ。確かに巻き込んでしまったけどそこだけは幸運何じゃないかな上条？」

「……だよな。そうかもな」

「それに俺達は何も出来ないわけじゃない。少なくとも成功を祈ることは出来る」

白済はそこまで言うとは軽く笑った

「そうと決まれば祈るとするか上条」

「ああ。そうだなそうしよう」

二人はそう言いながら大道の家に体を向けた

光は先程よりも強くなっている

それはどこか儚く幻想的だった

「ねえ。祈るんだったらボクも混ぜて欲しいな一真」

後ろから声が聞こえそちらの方を見るとそこにはクロスが立っていた

「やあ一真戻ってきたよ」「大丈夫だったのか？」

「当然だよ♪祈るんでしょ？なら早くしよ」

「そうだな…」

再び大道の家に向き直し三人は同時にこう言った

「「「頑張ってー（頑張れよ）インデックス」」」

第四話・絶望《ふこう》と見いだされた希望《こううん》（後書き）

今回は小萌センセの出番なし小萌センセゴメンナサイ
ですが一巻のはなし中に小萌センセは出す予定です
それと今回魔術の発動シーンがかなりカットされたのは原作で上条
が小萌先生の家から出て行った後何をやっていたかを自分なりに書
いたのでカットさせていただきました

次回予告

いきなり誰かに呼び出された俺達

俺達とはある男に出会いこう言われたキャラ紹介をしろ!?

科学と魔術が交差するとき物語が始まる!?

番外編・オリキャラ紹介その1※若干のネタバレ含む

白済「なあ上条？」

上条「何だ」

白済「何で俺たちこんなところに呼ばれたんだ？」

クロス「何でなの当麻？」

上条「俺も知らん！」

白済「えーいきなり誰かに今すぐ〇〇って所に来いと言われた俺たちですが、正直どうしたらいいかわかりません」

上条「白済お前誰に言っただ？」

白済「ん？この状況がわからないであろう読者のために説明したんだ」

大道「そんな説明で大丈夫か？」

白済「大丈夫だ問題ない」

大道「なら良いんだけど」

上条「良いのかよ！それかなりの高確率の死亡フラグだぞ！！」

クロス「少しブーム去ったしねそのネタ」

白済「大丈夫だ問題n」その幻想をぶち殺す！！「ギョエへ！」ク

ロス「ねえみんなあそこに誰がいるんだけど…」

大道「ほんとだ逆立ちしながら足でゲームやってるよ」

上条「そんなの居るわけ：「俺の事よんだか？」嘘！？居た！？」

白済「あんたが俺達を呼んだのか？」

???「そうさ俺があんたらを呼んだのさ」

クロス「で名前は？」

???「アークと言うんだよろしく」

白上大クロ「「「よろしくお願いしまゝす」」「」」

アーク「（うわっ軽！）えっと今回呼び出したのはお前達にこの小説のキャラ紹介をして欲しいんだ」

白済「キャラ紹介！？自分が出てる作品のキャラを自分でか！？」

大道「面白そうだね。よし乗った僕は参加させてもらうよ」

クロス「ボクもやらせてもらうよ♪」

上条「ハア不幸だ…」

アーク「どうする白済君？君以外は（一人強制的だが）みんなOKみたいだぞ？」

白済「本当に強制的みたいだな。まあ良いぜ仕方ないしな」

大道「まずは誰から紹介するんだい？」

クロス「そこは僕でしょ」

白済「俺だな主人公だし当然だろ」

上条「いや俺だろ」

白済「だまれ！原作キャラが！！」

上条「白済テメェ。俺を除け者にするならまずは、その幻想をぶち殺す！！」

白済「やってやるよ！」

クロス「洋どうにかして収集付かないよ」

大道「仕方ないしな…ドカン♪」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアン

白上「「ぎやああ不幸だー!!」」

アーク「お前ら…バカなのか？ジャンケンとかで決めようとしようとしないのかよ」

大道「ふつう気付くよね。その考えに」

アーク「じゃあジャンケンで決めろ」

全員「「「最初はグージャンケン…」」「」」

~~~~~

白済「よっしゃあ!! 主人公補正サイコー!!」

クロス「負けた」

大道「一発だったね今の」

上条「不幸だ…」

アーク「では今作の主人公である白済一真の紹介だ!」

名前

白済一真  
しらすみ かずま

性別

男

能力  
イマジンメイカー  
幻想作製

その名の通り幻想を創り出す事の出来る能力

白済が幻想に設定すれば何でも創り出す事が出来るのだが”制約”  
と言うモノのせいで創れる幻想も制限されている

容姿

見た目はBLAZBLUEのハザマそのまま髪をダークブルーにしたのみ

ただし指ぬきグローブと二重ベルトはしてい無い

性格

クールだったりバカだったりする性格なのだがたまにS（上条限定だが）を発揮する

好きなもの

面白いもの

ゆで卵

嫌いなもの

面白くないもの

（理不尽の理由で他者が虐げられる等）  
自分

~~~~~

白済「こんな所だな」

上条「白済って自分の事が嫌いなのか？」白済「……ああちよつとな」

アーク「暗い話をするなあ！そしてそれは一番重要なんだから言くなよー！！」

クロス「さ、残ったメンバーで再びジャンケンだ♪」

上クロ大「「最初はグー（略）」」

クロス「やったー！ボクの勝ちだ♪♪」

アーク「さて次はヒロイン（？）の紹介だ」

白済「Σちよっそれネタバレ！！」

名前

クロスレイジ・アイリス

性別

男／女

能力（魔法名）

運命を切り開く剣

G l a d i u s 9 9 9

魔術の使い道は剣の召還や創造など『自らが剣と認識したものを操る』事が可能

そのため剣と認識出来る部分一（刃、刀身等）が存在すればたとえ用途が剣でなくとも召還等が可能
例・刃が付属した銃等

容姿

東方projectの洩矢諏訪子の髪を黒くしたバージョン
瞳の色も髪と同じ黒なのだが時折金色に変わるときがある

性格

とても明るいのかじつは『乖離性同一性障害』俗に言う多重人格でありいつも出ている基本人格がクロスであり時折現れる金色の瞳の時はレイジと呼ばれる

もう一つの人格が存在するのだがそれは封印されている
因みに性別はクロスの時に女でレイジの時に男である

~~~~~

クロス「ボクの紹介は終わりだよ♪」

白済「クロスお前あの時自分は男だとか言ってなかったか？」

上条「それだとこの説明がおかしくなるんじゃない？」

レイジ「ゴチャゴチャうるさいな！！細かいことは気にするな！！」

白上「「レイジになった!？」」

クロス「どうしたの？二人してそんな『何か見てはいけないモノを見た』ような顔して」↑物凄い威圧感

白上「「……イエナンデモアリマセンクロスサン」」

大道「さて次いこうか」

大上「「最初は(略)」」

大道「よしっ勝った!」

上条「……どうせ負けるに決まっていたよ…(泣)」

アーク「次は大道洋の紹介だ!」

大道「ゆっくり見ていてね!」

名前

大道洋  
だいどうよう

性別

男

能力

????

未だ不明

容姿

心霊探偵八雲の斎藤八雲のような見た目

霊を見ることが出来ないが一応片目は赤である

性格

頼まれたらイヤとは言えないような性格であり白済の腐れ縁でもある

~~~~~

大道「まっこんな所だね僕の事は」

白済「洋あんたの能力が未だ不明なのはどういうことなんだ？」

アーク「それなんだが、実を言うともまだ決まって無いんだ」

全員「「「「……………」」」」」

大道「アーク？終わるのかい？」↑アークの口にTNTぶち込みながら

アーク「もがもがふいはへん（すみません）」

大道「やだ♪」↑起爆スイッチON

ドガアアアアアン

クロス「本日二度目の爆発被害者はこの作品の作者でアークでした。それでは」

白済「アークに黙祷」

上条「骨は…拾えないな。主に大道さんの威圧のせいで」

アーク「勝手に殺すな！俺は生きているぞ」

白上大クロ「「「BA☆KA☆NA有り得ない！」」」」

アーク「ハツTNT如きで殺せると思ったか」

大道「チツTNTじゃなくてRPG7撃ち込むべきだったか」

上条「あんたなんてモノ持ってたんだ!？」

白済「ちなみに持ってる物で一番強いのは？」

大道「対暴走能力者用の銃を改造して作ったものかな。威力は…そうだな核シェルターを紙屑みたいに扱えるくらいかな？」

白上クロ「「「アンタナニヤッテンダ!？」」」」

アーク「（使われなくてよかった）もうそろそろ終わりにするぞ」

白済 「それじゃあ全員で」

全員 「」「」「これからもある異能の幻想作製イマジンメイカーをよろしく！」
「」

番外編・オリキャラ紹介その1※若干のネタバレ含む（後書き）

次回予告

俺達を逃がすために神裂と戦うことになったクロス
クロスは神裂と戦っている中で神裂にとある秘密を話す

科学と魔術が交差するとき物語は始まる

第五話・最高の剣士VS聖人（前書き）

今更ながらこの小説たまに独自設定があるので注意してください
（・――）――

それではとある異能のイマジンメイカー幻想作製始まります

第五話・最高の剣士VS聖人

カン、ガキンッ！！

先程からずっと続いている金属音
それは剣と剣がぶつかり合う音だった

「くっ強い！！」

「どうしたのまさかそれでおしまいなの？」

押されているのは世界で二十人しかない聖人の一人神裂火織
押しているのは最高の剣士ソードマスターと呼ばれるクロスレイジ・アイリス

なぜ二人は戦っているのかそれは数時間前に戻る
side cross

まさか街中に魔力の固まりをばらまかれるなんて
そんなことを思いながらクロスは昼間から走り回っていた
なぜ走り回っているのかそれはこの学園都市に何者かによって大量
にばらまかれている魔力の塊をクロスが察知して一つ一つ潰して行
っていたからだその途中で一真と出会いなかなか穫れなかったぬい
ぐるみ一（と言う名の魔力の塊）を取ってもらったりしながら全部
をつぶし終えたのは五時間程たった後だった

クロスは疲れた表情でため息をついた

「ハア疲れた。いったい誰がこんな事を。ボクが魔力探知苦手なの
わかってやってるよな…ッ！？」

クロスは何かを察知すると急いでその方向に向かった
それは

その方向は白済の住んでいるマンションだった

「迂闊だった今までの魔力の塊は全てダミーだなんて気付かなかった」

焦りながらも必死に走るクロスは誰がこんな事をしていたかを考えていた

「やっぱり”あの二人”なのかな。だとしたら狙いはあの娘しかない。それかローマやロシアかもしれないな。どちらにしろ早く行かないとインデックスと一真が危ない！」

自分でも気付かないうちに声に出しているクロス
彼はそんなことは気にせず速度を速めた：

~~~~~

「これは…人払い」

クロスは今白済と出会ったマンションの前にいる  
先程魔力の塊を全部潰して一息ついた矢先に白済のマンションに魔力を感じてみれば仕掛けてあった人払いそしてそれよりも異常な事が存在していた

「この空間…漠然だけど魔力に穴がある」

そうこのマンションに満ちているはずの魔力がある一点のみ存在していないかった

「怪しい…あそこにいけばわかるかも」

そう呟きクロスはその場からマンションの三階へと跳躍そこで見たのは

背中を切られたインデックスを抱えている男と血まみれの一真が立っていた

そして対峙していたのは

「神裂火織」

その後の行動は早かった先ずは手に剣を呼び出し神裂に投げつけ気を散らせ一真の前まで移動そして冒頭に戻る事になる

数分間斬り合ったあと神裂はこう言ってきた

「あなたは何故私達の邪魔をするんですか」

クロスは真顔で答えた

「君がインデックスや一真を傷つけたから」

「ですがそれは仕方の無い事。私もあの娘が傷つくと思わなかったんです」

顔を逸らしながら言う神裂にクロスは言った

「だけど可能性はあったよねあの娘のインデックスの『歩く協会』が壊れる可能性くらい」

『歩く協会』それは物理・魔術問わず全ての攻撃を受け流すことが出来るという服だ

それはいくら神裂でも切り裂くことは出来ないはずだ

そう

何者かにその機能を壊されない限り

その事を神裂に伝えたと案の定神裂は狼狽えた

「まさかおかしいとは思いましたが本当に…」

「ま、それも難しいことではあるけど」

そこでクロスは区切りさらにこう続けた

「それでもボクは君を許さないよ」

「…なら戦わなくてはいけないのですか？」

悲痛な表情をしながら神裂はクロスに聞いてきた

それにクロスはハッキリ答えた

「そうするしかないよ。ボク達は進む道を違えたのだから。君たちは彼女の記憶を奪うことで助けようとしてる。ボクは…」

神裂を見据えてクロスは自らの決意を告げた

「本当の意味でも助ける」

「そう…ですか…：ならば場所を移しましょう。ここでは危なすぎる」

そう言うと二人はその場から姿を消した

二人は広場に場所を移しその場に人払いをはった

「ここなら誰にも被害は及ばないよ」

「本当に…戦わなくてはならないのですか…」

未だに戦うことを拒んでいる神裂

「拒むのも当然か…それが神裂の信念だもんね。だからこそボクは止まらないあの娘はボクが助けなきゃいけないから」

一瞬クロスの瞳が金色に変わり自らの魔法名を告げた

「G l a d i u s 9 9 9 （運命を切り開く剣）」

直後クロスの瞳が完全に黒から金へと変わった

「オレは名乗ったぜ？あとはお前だ神裂」

口調と纏う雰囲気ガラリと変わったクロス

「その前にあなたは…クロスなのですか？」

クロスの急変を不審に思った神裂はクロスにたずねた  
それに対してクロスは

「オレはクロスじゃねえ。オレはレイジ、クロスの中に眠るもう一つの人格」そうレイジは答えた

「たしか……二重人格と言うものでしたか？」

「ああ。正確には多重人格だがな。オレ……オレ達の中にはもう一つの人格が潜んでいる。それが出て来たらお前は瞬殺だな」

どうやらクロスは自分を含めて三つ人格があるようだ

そしてその人格の一つであるレイジは急かすように告げる

「早く名乗れって。オレはとっとと人格交代して寝たいんだ」

「仕方ないのですね……ならばSalvare000（救われぬ者に救いの手を）！」

魔法名を彼女が名乗ると周りの空気が変わる

冷たい刃のようなそれでいてどこか暖かい雰囲気へと

これが神裂の言う信念なのだろう

その名の通り『救われなかった者への救済』レイジはフツと笑いながらもこう言った

「流石だよ本当に。だからこそオレはお前と戦う。運命は自らで切り開かなければいけないからな」

そう言うレイジの手には刃渡り1，5メートル程度の片刃の剣が現れた

それを片手で構えた

「七閃」  
ななせん

神裂は一瞬のうちに七回相手を殺せると言われる斬撃を放つ



それに対しレイジは緩やかに剣を構え言った

「はっしょう八翔」

刹那神裂が放った七つの斬撃は一瞬にして消滅した

「ばかな!？」

驚愕する神裂にレイジは冷静にこう言った

「一瞬で七回しか殺せない程度なのに、一瞬をさらに引き延ばしたうちの刹那の間に八回、敵を塵に出来るオレの攻撃が防げるとでも？」

「くっならば使いたくはなかったのですが…唯閃ゆいせん!!」

刀を鞘から抜き神を殺す一撃を放った

「聖人の力は健在か……だが無駄だな」

軽く手に持つ剣を払うすると不可視の衝撃波が神裂の唯閃とぶつかる

「まさか唯閃も…」

「いや相殺した訳ではない。ただ吸収してこの剣の力に上乘せさせてただけだ」

あっさりと手の内を明かすレイジ

剣の刀身を片手で撫でる

「この剣は存在することの無い…だから妨害も出来ない…そしてこれは相手の攻撃を吸収するほどに力を増す」

剣を構え直す

神裂も同様に刀を構えた

「自らの攻撃を喰らいな」

「そうはさせない!!」

互いの必殺技を繰り出す

「唯閃！」

「真撃」  
しんげき

片や神を殺す一撃

片や相手の攻撃を利用する存在しない一撃

「「ハアアアアアアアアアア！」」

剣と剣がぶつかる

トスッ

軽い音が鳴る

その音の正体は

「やっぱり神様殺せる攻撃は吸収仕切れないよな」

レイジの剣が床に突き刺さる音だった

折れた剣を投げ捨て呟いた

「凄いな聖人は…全てに置いて常人を軽く上回ってる。常人おれじゃか  
てないかもな…」

「跳躍だけで三階まで飛び上がった者が言う言葉ではありませんね」

ハハハとレイジは笑い再び剣を呼び出した

「お次は全方位攻撃だ」

その言葉に神裂は武器を構え辺りに注意を向けた

レイジはその場で剣を振るい疾風のような早さで神裂に近づく

「残念♪さっきのは嘘」

「ッ!？」

とっさに鞘ではじき間合いをとる神裂

「汚いですね」

「ほめ言葉と受け取るよ」

先程の攻撃を当然としか思っていないレイジは神裂の言葉を軽く受け流す

「さてこっからが本番だ」

そう言い両手を広げるレイジ

変化は突然起こった

「なっ!？」

レイジの周りには歪な剣が複数浮いていた

剣は時折ノイズが走り輪郭が曖昧になる

「この場はもうオレの領域だ。これに勝つには一度死ぬしかない。

ま、死んだらそこでお終いだがな」

右手をゆっくりと神裂に向け命令コマンドを呟く

「行け」

その命令の通りに剣は動いた

初撃は神裂の四肢を潰す様に動きそれを神裂が居合いではじく  
二撃目は的確に急所を狙う攻撃神裂は身を屈めそれを避ける

この間僅か0，5秒

「これも切り抜けるか…ならしうがない。集まれ」

レイジは手を挙げる

すると剣は言葉の通り集まり一つの剣と化した

「理を反転させる無銘の剣」

色は白、形は先程と変わらず歪な長さ二メートル越えの一振りの両  
刃剣

その名の意味ははたして…

「七閃！」

神裂は再び七閃を放った

しかし

「無駄だ。その理を入れ換えろ」

無銘の剣が七閃にぶつかる

すると七閃は進行方向をかせ神裂へ襲いかかった  
神裂は驚きながらもそれを全て切り裂く

「いったい何を…したのですか？」

それは当然の反応だった

「やったことは簡単だもうネタはバレてるんだぞ？」  
「？」

どう言うことかわからないといった顔をしている神裂  
それにレイジはため息を付きながら言った

「ハアさっきオレは理を入れ換えろと言った。わかるか？その意味」  
「反射…ですか？」

「似ているようで違うな。正確にはあの剣に触れたものの方向を入れ換えただ」

神裂は啞然とした表情のまま言った

「そんな事が可能なんですか」

「この都市にもそれらしい事が出来る奴はいるんだから可能だろ」

神裂はその人物に合ったことはないが何故だか白髪で赤目の青年を  
思い浮かべてしまった

「と、どうする？お前の技は全て無効化したぜ？それでもまだやるか？」

「止めは刺さないのですか？」

レイジはそれを聞いて吹き出してしまった

「ぶっハハハ確かにこれじゃあオレはお前を殺せるだろうな…でも  
オレの中の人格クロスが殺すなと言ってるからな」

「あなたは一体何なんですか…」

疑問を投げかける神裂

「おいおい何者か何て質問は無しだろ？ 一応オレ達は同じ組織に属してんだからさ」

神裂は顔を逸らしながら言う

「必要悪の協会…」

「そうオレもお前もそこで寝ている赤髪もそして…」

言葉を止めるレイジにかわり神裂がその後を言った

「インデックスも、ですよ。それと貴方には聞きたいことがある」  
「何だ？」

神裂は言いにくそうにしながらも言う

「貴方は何故三年前に何もせず今になって彼女を助けようとしたのですか？」

「……………少し昔話をしよう」

そう言うレイジは昔を思い出しながら語った

オレ達は上からの命令でインデックスの監視役になった  
その役は家族

当然オレ達は承諾した

そのままオレ達とインデックスはごく普通に暮らした  
インデックスが魔導書の毒に侵されているのを知りながらな

そしてオレ達は記憶の消去をする日まで何事もないかのように過ごした

「その後はおまえが知ってる通りだ。オレ達は彼女の記憶を消し、  
表舞台から居なくなった」

「なら尚更今出てくる意味は無いはずですが？」

「普通はな。だがまだおまえが知らない事が幾つかある」

そう言いレイジはまた話し出した

彼女の記憶を消した後オレ達は彼女の『完全記憶能力』について調べたんだ

そして分かったことがあった

『完全記憶能力』では人は死ぬことはないってな

そもそも人間の脳はモノを忘れなくても140年分の記憶を保存できるとらしい

それに記憶は種類によって記憶される場所が違うんだ  
つまり彼女は完全記憶能力のせいで死ぬ訳ではなく

別の、例えば魔術等によって脳が圧迫され死んでしまう

「そんな…ですが…」

「やっぱ信じられないか？」

無言でうなづく神裂にレイジはこう続けた

「別に信じなくても良い。だがオレ達はもう一つ可能性の話だが彼女にかかっている”かも” 知れない魔術を無力化出来るかも知れない奴を見つけ出した」

レイジはこう告げた

「アンタが切り裂いた男白濱一真だよ。正確には彼の能力だがな」

「超能力者が…ですか？」

明らかに嫌そうな顔をする神裂にレイジは言った

「一真は超能力者であって超能力者ではない。この街のは後付けだがあれば元かららしい」

「だとしてもなぜ彼なのですか？」

その問いにレイジは少し考え答えた

「……そうだな。逆に質問しよう。一真はアンタが見た中で一度でも魔術を無効化した所を見たか？」

縦に頷いている神裂

さらにレイジはこう言う

「もう一つ聞くが人払いを展開した状態で一真は戦闘に割り込んだりしなかった？」



「…………はい。流石にあれは驚きました。魔術師でもない者が自力で人払いを破壊せずに堂々と入ってこれるなんて」

レイジはやっぱりか、と呟き神裂にこう言った

「一真は魔術にかんして何らかの耐性があるのか、または彼の能力がそう言うモノに関して強力な効果があるか、だ」

そこまで言うのとレイジの目が黒に変わる

「でボクが言ったことで分からないことはある？」

どうやらクロスに戻ったようだそれを見て神裂は少し表情を緩めながらこう答えた

「いえ。科学に関しては分かりませんがたぶん説明されても分からないでしょう」

「ふーんならボクは帰るね」

あまりに突然なことを言うクロスに神裂は啞然としてしまった

「だって君じゃボクたちに勝てないし、ボクたちは目的を告げただから別に良いでしょ？」

「イヤ…別に構いませんが…」

「なら、じゃあねー♪」

最後まで啞然としている神裂と未だ気絶しているステイルをほったらかしクロスは帰ってしまった

「……………出直しますか」

神裂も（ステイルを引きずりながら）その場を後にした

## 第五話・最高の剣士VS聖人（後書き）

次回は戦闘は無しです

次回予告

インデックスが無事回復し得たつかの間の休息

上条はインデックスと外に遊びに行く

俺と洋は家とある話をしていた

そして目の前に現れる神裂彼女は戦う気は無いらしいのだが？

科学と魔術が交差するとき物語は始まる

## 第六話・つかの間の休息、そして…（前書き）

皆さんすいません投稿が遅れてしまってm（　　）m  
今回戦闘はなしです

それではとある異能の幻想作製始まります

## 第六話・つかの間の休息、そして…

side Shirazumi・一人称

インデックスの傷を治して数日が過ぎた

いまだにあいつ等はやってこない。と言うよりクロスが神裂（やらエロい服装のお姉さんと記憶している）をボコッて来たためしばらくは来ないだろう。と言っていた

因みにクロスは今ゲーセンでクレインゲームをしているはずだ。どうも自分でぬいぐるみを取れなくて悔しかったらしい  
つまりはつかの間の休息と言うわけだ

「あーあ暇だな」

何気なく言ってみたその言葉。最近は無かったためある意味良いのかも知れない。

「つうかどうすんだよこれ？」

目の前には散らばった本やらゲームやら。原因はインデックスと上条<sup>バカ</sup>が風呂から上がったインデックスの姿

※全裸です。

を見たため上条に全裸のまま噛みつくインデックスが暴れたためこうなった。全くここが人の家だと分かっていんのかな？

とまあ仕方なく俺達はあのバカどもを外にやり部屋の片づけをする事にした。因みに俺の隣では部屋をかたしている俺の腐れ縁でありこの家の主の大道洋がため息をつきながら俺に話しかけてきた

「はあこの数日白済達といて分かったことがあるよ」

「何だ？」

まあだいたい分かるが

「あの…上条君だったっけ？彼物凄く運がないんだね…」 「正解だっただろ？あの二人を家からいったん出しといて」

「ああ確かにそうかも知ね…下手したらより散らかるかも知れない」  
「そう何故俺たちがあいつ等に片付けさせないで関係ない俺等がやっているのか？」

そんなこと言うまでもない。あのバカにやらせれば高確率で今の状況より酷くなる。逆になにも起きない方がおかしいくらいにあれの不幸は異常なのだ。まあその分運に任せずに自らの行動力のみで動けるからそこは尊敬できるがな

「と言ってもめんどくせー」

「うん。流石に中々片付かないね」

もうかれこれ一時間近く片付けているのに全く減らないのだ。この家が無駄に広すぎるのがいけないのか、それとも俺等が遅すぎるのか？……うん、絶対に理由は前者だな。実際今居る（洋曰わく）小部屋でも俺の住んでるとこのリビング位あるぞ？

「なんか早く終わる方法無いのかな？」

俺が頭の中で自問自答していると洋が俺に話しかけてきたな。と言われても早く終わる方法か…

「うーん洋何かアイデア無い？」

「無いから聞いているんだよ。あー時間逆転させて元あった位置まで戻ってくれないかな」

とんでもないこと言うな洋は…だが時間を逆転させるか

「できなく無いぞ？」

「え？」

俺がそう言うとき洋は『なに言ってるの？』みたいな顔をしていた。だろうなそんなことでできないもん。普通なら。だが俺は普通じゃないんだな。これが。せつかくだから洋に説明してやるとするか

「簡単だな。時間の逆転は無理だがこの場の散らかってる物を元の位置に戻すくらいなら訳ないな」

「最初からしてくれよそれ」

疲れるからイヤなんだよな。ホントは。でもまあ一日中片付けは御免だからな背に腹は代えられん

「んゝ発動時の名前何にしようかなゝ」

一見どうでも良いかもしれないが案外これをしてないとイメージの定着が難しくなってしまう幻想を作製出来なくなってしまうんだ。そのため頭の中で創造するより言葉に出した方が圧倒的に成功率が上がる。

原理は英単語とかを覚える時みたいなのかな？

だとしても名前何にしようかな…逆転リバース分かり易くて良いだろ。うんそうしよう。決まれば早いな発動をさせるとしますか。

ん？誰だ今能力の無駄遣いとか言ったやつ。後で表でろ（＃へ―へ）

「逆転リバース」

意識を外から内へと移行する。イメージは物が元あった所に戻るよ

うな感覚……さてできたかな？

「凄いな白済は…何でも出来るんじゃないのか？」

意識の外から聞こえる洋の声。言い方から察するにどうやら成功したようだ

「おお我ながら良い出来だな…」

意識を元に戻して部屋を見ると散らかっていた物が全て元通りになっていた。さすが俺…なんだが

「疲れた〜」

そのまま後ろのソファ―に座り込む俺。だって慣れないことしたんだもんそりゃ疲れるよ。基本俺の創る幻想は何度か使用しないと使用時にとてつもない疲労感が襲ってくる。とは言っても丸一日この部屋でお片付け…なんてするより何十倍も気は楽なだけだな。

「なあ洋片付け終わったし何かしようぜ」

「ん？良いけど…何やるんだ？」

「……………」

片付けを終わらせたため暇になったから洋もいるし何かやろうと思っていたのだが、こっちの質問を疑問系で返されてしまったため何をするか考えているのだが正直何も思いつかない

「何も思いつかないんだが…」

そう俺が言うとは洋は顎に手を置きながら黙ってしまふ。どうやら考えているようだ



「うーん：あっそうだドラッグ○ンドラグーンの新宿end出来ないからクリアして」

あ？今何だったよ？あの鬱ゲーをやれと？

因みにドラッグオンドラグーンというのは『最後まで抗え』がキャッチコピーのアクションRPGなんだが内容はともかく複数あるエンディングが鬱過ぎるゲームだ

「大体洋何でこう言う鬱系が好きなんだ？」

洋はこういう鬱やグロゲーが好きでというよりそう言うのしか持っていない。そのため今まで気になっていたので今聞いてみた

「だっておもしろいじゃん？」

「面白いのは分かったから俺に鬱ゲーとかやらせるな。苦手なんだから俺」

俺はその類のゲームがとてつもなく苦手だ

「へーそういうのが苦手何だー一真は」

頭を抱えていると後ろから声が聞こえた。振り向くとクロスが立っていた。何故か大量のぬいぐるみを持って

「えーまず聞こう。どうしたんだ？その量のぬいぐるみ…」

俺が渡した金ではあそこまで取れんだろだって俺は500円しか渡していない。一回100円だとしても多くて5個位だろ。なのにクロスが持つてるのは7〜8個。有り得なくね？そう思っていたのがクロスがトンデモ発言をしてきた

「何かうまく行って一度に2個取ったりしたらこうなった」クロス  
お前適応能力高すぎだろ…あの時の涙目で頼んでくるお前に戻って  
くれ！あの顔は正直お前本当に男か？と思ったくらいだ

「涙目ってどういう事一真？」

「何でもないぞ！？」

にしてもどうやって俺の心をよんだんだ？サトリかお前は？

「意外とそうだったりしてね」

洋お前まで心を読むのか…

「ハアいろんな意味で疲れるな」

このサトリかもしれない二人の事を無視することにして俺は一人考  
えていた。

勿論、これからの事だ。

このまま行くと高確率である魔術師二人と戦うことになるだろう。  
それはなるべく避けたかった。こちらとしてはあまり戦力は削りた  
くはないからだ。それに奴等に増援が来ないとも限らないからな…  
問題は戦うことになった場合だ。まずこれ以上洋を巻き込むことを  
したくはない。なので今日明日にでも上条達に相談して別の場所に  
移った方が良く。そうなると思えば…自宅、無理だなあいつ等  
が監視しているかもしれない。まあ今も監視されてるかも知れないが

「……………ま……一真」

となるとホテルも不可だな。第一インデックスとクロスはIDを持つてない。その時点でアウトだな……

「…ねえ……かず………一真!!」

パコン!!

「痛っなんだよクロスいきなり叩くなよ…」

スリッパ片手のクロスが目の前に立ってる。いやゝスリッパってけっこう威力あるんだよねゝ

「さっきっから何回も呼んだのに答えない一真が悪いよ」

どうやら俺は考え事に夢中で呼びかけが聞こえていなかったようだ。ここは素直に謝るべきだろう

「すまんクロス。で、何だいったい」

「洋が呼んでるよ? 今玄関にいる」

「分かった。ありがとう」

そのまま俺は玄関に向かい、そこに立ってる洋に要件を聞いたのだが

「あ? 俺に客だと?」

「そうついさっき家にやって来て『白濱一真は居ますか』って聞いてきたんだ」

「今どこにいるんだ? そいつは」

「一応扉の向こう側だけど」俺の家ではなくなぜここに…そう思いながらも扉に近づく俺。扉を開けようとして俺は一つの可能性が思い浮かんだ

扉の向こうに居るのはあの魔術師達なのでは？

そうだとすれば俺の家でなくここに來た理由も見当が付く。ならば  
先程考えていたことが本当になるのかも知れない…

「……………」

俺はそのまま扉を開けた。そしてそこにいたのは予想していた人物  
だった

「お前は…」

「話があります白済一真」

長い日本刀を持った女性『神裂火織』だった  
俺は洋を一瞬見てそれから神裂に小声で伝えた

「（ここではマズい場所を代えるぞ）」

無言で頷く神裂はその場から離れていった。付いて来いという事だ  
ろうか

「クロス！」

「なに〜一真？」

クロスに先程のことを告げた。すると

「分かった。先に行ってるね」

そう言うとクロスは走って神裂が歩いていった方へ行った

「じゃあ洋、俺出かけてくる」

「行ってらっしゃーい」

後ろから聞こえる声の主に心の中で謝った

「（もう此処に来れないかも知れないな…）」

そう呟きながら

~~~~~

今俺は広場に来ていた。今この場に居るのは敵である魔術師神裂とステイル仲間のクロス。ステイル辺りに連れてこられたのであろう上条とインデックスそして俺の六人

「で、話ってのは何だ？」

俺がそう言うとはじめに口を開けたのはやはりというべきか神裂だった

「あなた達を此処に呼んだ理由は一つです。彼女の、インデックスの事です」

「いったいどういう事だ」

俺は少し強く神裂に返した。すると神裂は

「それに関してはクロスに聞いた方が早いかと。あ、ついでに言っておきますが私達に戦う意志はありません」

戦う意志は無いか：信用できないが今は乗ってやろう。罠だったら潰せばいいわけだしな。それよりも気になることを神裂は言ったな

「クロスについてのなぜだ？」

「ここからはボクが話すよ一真」

俺は神裂にクロスに聞けというのがどういう事か。それを聞こうとした所でクロスが割って入ってきた。まあクロスが今話した内容は俺が初めてクロスにあったときに話してくれた内容と同じだった。

「つとここまで分かった？」

「ああ。だがインデックスの体がそんな事になってたなんてな」

そんな事と言うのは一年周期で記憶を消さなければ死んでしまう事についてだろう

「私も驚いているんだよ」

やはりというべきかインデックス本人もそれは知らなかったらしいな

「でもよクロス」

「何？」

「だからと言ってどうやってインデックスを治すんだ？俺達は医者でも何でも無いんだぜ？」

「今からその事を話すつもりだったんだ」

俺が疑問に思っていることを聞くとクロスは再び話し出した

「まず、彼女の『完全記憶能力』について何だけどね、普通一年で記憶を消さなければいけないほど危ない訳ではないんだ。人間は本

来140年分の記憶を頭の中に保存できる。更に言えば記憶する内容でそれを保存する場所が違うんだ。例えば、そうだな：分かり易いのは魔導書を読んでそれが記憶されるのは『意味記憶』思い出を記憶する『エピソード記憶』みたいに役割で記憶する箇所は異なってくる。だからいくら魔導書を10万読もうがそれだけで記憶がパ
ンクするなんて事はない」

その話を聞き俺はクロスがあのに話してくれた時に感じた違和感が消えていった。にしても：何で魔術師二人は思いつき頭に？マ
ーク浮かべたような表情なんだ？

「つまりは魔導書意外の”何か”で脳が圧迫されているってことか
？」

俺は今聞いた話で立てた仮説を述べた。するとクロスは頷いて

「その可能性が高い。予想では魔術によっての圧迫の可能性が高い
ね」「：だとしたら俺の右手で」

上条の意見には賛成だ。こいつの右手ならインデックスにかかって
る魔術を消せるだろうからな。だがそれだと一つ問題がでる

「上条もし魔術がインデックスの体内にかけられていたらどうする
？」

「え？」

「お前のそれは右手がふれられる範囲でしか効果は発揮しない。な
ら俺の方が早く蹴りが付けられる」

問題と言うのは魔術を消せる範囲の差だ。体の表面に魔術が張られ
ていれば上条がやればいいだろう。しかしそれほど重要な魔術なら

破壊されやすい所ではなく体の中が妥当だろう。魔術に詳しくはないから分かんがな

「そう。だからこそボクは一真に目を付けたんだ」

「だからこそ？ つうとクロスは幻想殺しの事を知ってたのか？」

「一応ね。でも名前や顔までは知らなかったよ。だって最初から殺してしまうのではなくて、創る方を選ぶって決めてたから。それに一真には少し普通の人と違うところがあるしね」

そりゃあ…ステイルに普通じゃないって言ったけど……

「例えばどんな所が普通と違う？」

「じゃあ…あの時マンシヨンの前で何か変な違和感を覚えなかった？」

「違和感ってあれか？ 『来るな』 って頭の中で響いたんだ」

魔術師全員が驚いたような顔をしているんだが…この反応が普通なのではないの？

「えっと…私達が発動したものの効果は『何故かここに近づこうとはしない』といったものなのであなたの反応はありえませんか」

今まさに遠回しだがあなたは異常ですと言われたぞ。泣いて良いのか？ という冗談はさておき

「それがクロスが俺を選んだ理由か？ だとしても何でそんな事がわかったんだ？」

「調べたから。学園都市に人払いを張ったりしてね」

ああだからたまに人が周りから居なくなるわけだ

「いつの間に僕達に気付かれずに張ったんだい？」

「ボクは探査は苦手だけど隠蔽は得意だから」

「ふうん…」

「そこで考えついたのは一真は魔術に対して何らかの耐性がある。もしくは幻想作製にそう言ったモノに対する強い効果があるんじゃないか。ってね」

「それが本当だとして白済や俺達はどうすればいいんだ？」

「じゃあ本題に入ろう。インデックスを救う方法を今から話すよ」

そう言ってクロスは俺達にその方法を話し始めた

第六話・つかの間の休息、そして…（後書き）

クロスの探査は苦手発言は神裂やアックア等の異常に強い中から見
て低いでだけで一般魔術師のそれを軽く超えています
できれば次回で禁書目録VS白済一真をしたい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7694u/>

とある異能《チート》の幻想作製《イマジンメイカー》

2011年10月8日03時48分発行